

# 地縁と志縁の関係主体による 効果的なまちづくりプロセスの考察

藤澤 徹<sup>1</sup>・秀島 栄三<sup>2</sup>・吉村 輝彦<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 アルカダッシュ株式会社 (〒454-0003 愛知県名古屋市中川区松重町4-41)

E-mail:fujisawa@arkadas.co.jp

<sup>2</sup>正会員 名古屋工業大学大学院工学研究科 (〒466-8555 愛知県名古屋市中区昭和区御器所町)

E-mail:hideshima.eizo@nitech.ac.jp

<sup>3</sup>非会員 日本福祉大学 (〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田)

E-mail:yoshi-t@n-fukushi.ac.jp

これまで、地域のまちづくりに関わる主体は、町内会・自治会といった地縁組織が中心であったが、時代の変化、価値観の多様化に伴って、こうした地縁組織への加入率の低下、地域団体の役員への担い手不足が課題となっている。一方で、地域内だけでなく外部からの志縁的な市民活動団体の活動が活発になる等地域社会を取り巻く環境も変化している。

そこでは多様な主体が、目標を持ちながら、活動を興していくことになるが、各主体はそれぞれの関心や利害に基づき、そのプロセスに関わっていくため、連携を行う場面や利害が対立する場面が出てくる。それゆえ、合意形成の局面では段階ごとにどのようなステップを踏んで、まちづくりを進めていったらいいのか、また、外部者が段階毎にどのような支援的役割を果たしうるのかが焦点となる。本稿では、近年多くの地縁縁・志縁者によるまちづくり活動が具体化されつつある地区を事例に、そのプロセスとその成果を整理し、まちづくりの段階における地縁・支援者の協働について考察した。

**Key Words :** Machi-zukuri, Narrative, Story, Actor, Local Resources, Activities

## 1. はじめに

これまで、地域のまちづくりに関わる主体は、町内会・自治会といった地縁組織が中心であったが、時代の変化、価値観の多様化に伴って、こうした地縁組織への加入率の低下、地域団体の役員への担い手不足が課題となっている。一方で、地域内だけでなく外部からの志縁的な市民活動団体の活動が活発になる等地域社会を取り巻く環境も変化している<sup>1)</sup>。

近年、各地域内でまちづくりを進めていく上では、多様な主体が、緩やかな目標を持ちながら、活動や事業を興していくことになる。実際に、各主体はそれぞれの関心や利害に基づき、そのプロセスに関わっていくため、連携を行う場面や利害が対立する場面が出てくる<sup>2)</sup>。それゆえ、課題上の合意形成の局面では段階ごとにどのようなステップを踏んで、まちづくりを進めていったらいいのか、また、外部者が段階毎にどのような支援的役割を果たしうるのかが焦点となる。第三者支援の観点からは、外部者は、相互作用と関係変容の促進、ネットワー

キングによる活動化・事業化・合意形成に向けたコーディネートにおいて、様々な役割を果たしうる。そこには、地域をこうしていきたいという想いを紡ぎ、同時に、そうした想いや地域の物語を背景にどのようなアクションを興していけるかが鍵となる<sup>1)</sup>。

本稿では、モデル地区として近年多くの地縁縁・志縁者によるまちづくり団体が出現しその活動が具体化されつつある名古屋市西区の円頓寺・四間道界隈まちづくりを事例に、そのプロセスや多様な主体の関わりとその成果を整理し、こうした民間主体のまちづくりとその段階における地縁・支援者の協働について言及し今後の展開について述べる。

## 2. 当該地域について

### (1) 名古屋市の取り組み

名古屋市で、2009年12月からモデル実施された「地域委員会制度」は、学区レベルで地域課題を解決するために、投票で選ばれた委員を中心に公開の場で議論し、地域予算を決定する取り組みである。難しい地域課題の解

決のためには、地域の事情に詳しい学区連絡協議会や町内会・自治会と専門性を有するNPO、企業等多様な主体が相互に強みを活かして、連携して取り組む仕組みが必要になってくるとの認識のもとで、地域委員会は制度設計された。また、2011年12月に策定された名古屋都市計画マスタープランにおいて、戦略的まちづくりを支える仕組みとして、「地域まちづくり」が位置づけられている<sup>3)</sup>。これは、「地域がより良くなるために、地域の力(考え)で地域を育てること」であり、「地域ごとの強みや弱み(魅力や課題)を踏まえ、計画・ルールづくりから、将来にわたる施設の管理やまちづくり活動など、地域の方々によるまちづくりもあわせて進めていくこと」を目指している。この「地域まちづくり」は、従前の地区総合整備のアプローチを転換させたものとも言えるが、多様な主体(住民、自治会、NPO、商店街、企業、行政)が、役割分担を明確にしつつ取り組むものである。

## (2) エリアの特徴

高層ビルが立ち並ぶ名古屋駅と名古屋城の間にある円頓寺・四間道・那古野界隈は、戦災による被害が少なかったエリアで、蔵や町屋、屋根神等をはじめとする歴史的建造物が残っており、堀川に面する四間道地区は、1986年6月には、名古屋市の「町並み保存地区」に指定されている。地区の中には、県指定文化財の江戸期の建物等があり、地区外にも身近な歴史的建造物が数多く残っている。近年、こうした地域資産を活かした取り組みが増えている。下町情緒たっぷりの商店街を中心に情報誌発行、空き店舗仲介、郷土史研究等のまちづくり活動が活発に行われている。名古屋市は、都市計画マスタープランにおいて重点地域としての「納屋橋・四間道地域」を、堀川まちづくり構想では、「四間道エリア」を、それぞれ位置づけている。

## (3) 各団体の出現

当該地域の2000年以降のまちづくり団体の活動の系譜を表1で示す。表1-①は名古屋市の特色ある区づくり事業で生まれた活動の一環である。当事業は、名古屋市が市内16区の各区役所レベルで各区の地域資源を活用したまちづくりを推進した。このエリアでは、町並み保存地区指定以降の10数年あまり主だったまちづくり団体の登場はなかったが、それ以降多様な団体が登場することとなる。

## (4) 当該地域のまちづくりの軸

当該地域のまちづくりは、そのエリアの特徴から、町並み等の景観を意識した歴史的界隈性と、商店街を舞台とした日常の界隈性の二つの視点の中で、多様な主体が多彩な活動が展開され、その中で、それぞれの課題を具体化しながら活動が行われてきている。

表1 まちづくり団体の系譜

<b>①ものづくり文化の道推進協議会</b>
設立：2000年4月 区役所を中心に、観光ルートのネットワーク、一般市民への認知、当該地域の方向性を探るものとして立ち上がる。
<b>②美濃路まちづくり推進協議会</b>
設立：2000年9月 東海道と中山道を結ぶ「美濃路」に残された歴史的町並みを再生活用し、地域の活性化を図る。
<b>③堀川文化を伝える会</b>
設立：2000年10月 堀川を中心とした名古屋の歴史や独自の文化を、広く後世に伝えるために、市民ボランティアが集まり結成した。
<b>④屋根神フォーラム</b>
設立：2003年4月 幕末頃から名古屋地域の町屋の屋根に祀られるようになった「屋根神様」を、多くの人に知ってもらうため、ガイドウォーキングを実施している。
<b>⑤那古野一丁目町づくり研究会</b>
設立：2004年4月 四間道周辺に住む住民が何らかの対抗策として、景観を考える研究会を立ち上げる。
<b>⑥円頓寺げんき会</b>
設立：2004年10月 商店街を愛する主婦数人が、円頓寺商店街を元気にしようと毎月第一日曜日、円頓寺商店街(東側アーケード)にて「ごえん市」を開催することになる。
<b>⑦縁側妄想会議編集室 Paw</b>
設立：2005年4月 商店街の外に働きに出ていた40代の女性が地元に戻ってきた際、かつて、自分が知っている賑わいのある商店街に思いを馳せながら、新しい展開を模索する。
<b>⑧NPO法人ゴンドラと堀川水辺を守る会</b>
設立：2007年4月 「水の都ベネチアのように、ゴンドラを浮かべて楽しめる堀川にしよう」という願いを込めて発足した。
<b>⑨那古野下町衆</b>
設立：2008年3月 商店街の若手店主らが中心となり、商店街理事会組織とは別のスキームを提案。ソフトからハードまでのまちづくりを具体化し、当該エリアの中心的な団体となる。
<b>⑩ナゴノダナバンク</b>
設立：2009年10月 家主と借り手の仲介の役割(サブリース機能等)を作り活動を開始する。
<b>⑪円頓寺・四間道界隈まちづくり協議会</b>
設立：2012年10月 魅力ある四間道・那古野界隈のまちづくり構想の作成に向けて検討を重ねる。

歴史的界隈性のまちづくりでは、歴史的建造物や屋根神様の喪失や駐車場化や高層マンションの建設といった土地利用にも関わる変容が着実に進む一方で、歴史的建造物を活かした取り組みも行われている<sup>4)</sup>。他方、日常の界隈性のまちづくりの中では、商店街においては、

依然としてシャッターを降ろした店舗も少なからずあるが、従来から行われてきた七夕祭り以外にも、多彩なイベントの開催といったソフトな取り組みを通じた賑わいづくりや空家バンクによるハードの空間の再生が、前向きな明るさを醸し出している。こうした二つのまちづくりの軸（このエリアの界限性がもたらす魅力）に触発されて多くの関わりも増えてきている。

### 3. 地縁と志縁によるまちづくり

当該地区のような歴史あるコミュニティでは各々が年月を経て共通認識が形成されている一方で、新たな問題への対処方針を構成員各自が持っていないことも多く、個々あるいは全体として問題の捉え方が変化することがしばしば起きる。

上述したように、まちづくりにおいて地縁者と志縁者との協働はもはや必要不可欠になっている。円頓寺・本町商店街では若手商店主らによる既存の商店街の理事会とは異なる、外部からの意見を聞く会が定期的で開催され、その会を原型として地縁者と志縁者による新しい団体が立ち上がっている。

これまでに当商店街が外部の支縁者や識者等を招き商店街運営に関する意見交換会を実施することは稀であったが、商店の減少等で迫ってくる商店街振興組合の消滅等の現実的な話題がそこにはあった。特に商店街の財産であるアーケードの維持管理の側面で、商店街内での負担者が減っていくなかで、以前のような管理スキームだけでなく、異なったスキームとして外部からの意見をどのように具体化していくかという議論が展開された。そのようなプロセスを背景に地縁と志縁によるまちづくり団体である那古野下町衆は生まれた。

#### (1) 那古野下町衆（なごやしたまちしゅう）

##### ・組織概要

那古野下町衆(以下那古衆)は地縁である商店街の若手商店主・四間道界隈の住民と、志縁である、まちづくりコンサルタント、大学研究室、建築家、企業らで組織化された団体(表-2)である。

那古衆の活動は、これまでに商店街を含む当該地域が抱えていた課題にすべて向き合う形で指針(表-3)が設定されている。

##### < I 問題提起 >

指針の問題提起とは、特に商店街で実際に起こった事例をもとに考えられた課題である。

表 2 那古野下町衆構成

四間道界隈（地縁）	雑貨 1 喫茶 2
円頓寺商店街（地縁）	履物屋 1, 飲食店 3 化粧品 1 買回り品店 2
円頓寺本町商店街（地縁）	履物屋 1, 飲食店 4, 買回り品店 2
大学（志縁）	大学 2
企業（志縁）	設計事務所 2, コンサルタント 2, 宿泊施設 1
2014年4月	24名・企業

I-①は明治時代から続く甘物屋の店主から、各商店の統一したデザインの提案があった。その昔、円頓寺商店街・本町商店街では多くの共通アイコンがあり、店舗のファサードにおいてもそれぞれに共通の設えが存在していた。これらの設えは誰かが指示して推進していたのではなく、店主自らが商売繁盛に向けて共有デザインを目指していたとの考えが強い。今後、そのように商店主らが自主的に参加できる店舗の設えを考えていこうという思いがある。

I-②に関して、これまでに商店街として統一的なセールプロモーションをしてこなかったことに対して、商店街を含めた地域の魅力をどのように売り出していかかという考えから生まれた。そもそも商店街は独立した店舗の集まりが偶然的に出現し、その個店群が面となり、やがて商店街へと形成していったと考えられている。それゆえに歴史ある各店舗は一国城主的な考えである場合が多い。時代背景とともに、はやその考えでは太刀打ちできないことは明らかである。そこで、個性のある店舗らがより全体でプロモーションしていく必要があるという考えが生まれた。

I-③に関して、商店街内に同種類の店が並列する場所がある。互いの店のオープン時は違っていたが、それぞれの出店計画は時期を変えて既に決定していた。出店計画の情報は商店街理事会では把握しておらず、また、それぞれの店主らの間で計画時に話し合いはなく、結果的に同業種の店舗が連続して立ち並ぶこととなった。一般的なショッピングモールでは店舗レイアウトは一定の統治のもと計画がなされるものであるが、この事例は商店街としてのガバナンスの弱さを露呈した。

I-④に関して、I-①②③の課題をもとに、新しくできた地縁・志縁組織によるまちづくりの在り方を議論するための課題として設定されている。まちづくりを進めるにあたり、行政からの支援や介入についてもここで議論されている。

表 3 那古野下町衆の指針

I 問題提起	
①店舗の設え	店舗内の装飾や改装, 店構えについての提案
②マネジメント	お客を呼ぶための手段等の提案
③商店街の掟(おきて・ルール)	商店街として景観・秩序を保つための「掟」づくりを提案
④那古衆ブランド	地縁・志縁組織はどのようにあるべきか
II 行動企画	
①マップ制作	店舗内の装飾や改装, 店構えについての提案
②イベント企画	イベントの提案. 各商店街・四間道境界で実施されるイベント情報のとりまとめ.
③空き店舗活用	空き家バンクシステムを中心に活動を進めていく.
④情報発信	HP 開設・メーリングリスト管理

< II 行動企画 >

次に, 指針の行動企画とは, I 問題提起に呼応する形でそれぞれが設定されている。

II-①は商店街を含んだ当該地区の観光資源をアピールすべく, 明治・大正・昭和時代のそれぞれの視点からのマップを作成した。このマップは後述するスマートフォンアプリコンテンツの「なごあるき」として発展している。

3つの物語マップ「江戸の風情をめぐる」「明治の風情をめぐる」「昭和の風情をめぐる」は当該地域のまち歩きツールとして役立っている。

II-②は, 当該地域魅力をより伝えていくために商店街単独ではなく, 那古衆スキームでのイベントの実施を提案している。これまで商店街のイベントは商店街構成員による企画運営がなされていた。それゆえに各店舗での負担が大きく, 店舗数・構成員が減少する度にイベントそのものも縮小を強いられてきた。那古衆スキームにおいては, より発展的にイベントを実施していくために, 那古衆が主体となって実施する「主催イベント」と, 商店街のアーケードの下を外部の団体に貸すだけや, 那古衆が協賛する等の「協力イベント」の大きく二つの軸を持ってイベントを展開している。

II-③は商店街を含む四間道境界においての長年の課題を具体化させたものである。当企画は現在ナゴノダナバンクとして那古衆メンバーを中心に構成されている。特に, 中心となっている地縁者でもある建築家のリーダーシップのもと, 現在 12 物件が手がけられお店等をオープンしている。

これまでに, 当該地域には多くの不動産屋が家主と借り手との媒介契約に向けて勤しんできたが, 大きな成果は得られていない。その理由として, 歴史的なコミュニ

ティにある特有の人間関係や風習等, 外部からは表面的には見えづらい関係性が家主と借り手のマッチングを難しくしてきた。

ナゴノダナバンクではそれらの文化に対して, 特に各商店街理事会での調整や, 出店後の日常生活におけるアドバイス等を強化し図 1 におけるそれぞれのパターンを具体化している。ナゴノダナバンクの構成員は基本的に那古衆のメンバーで構成されており, 役割分担は図 2 の通りである。各専門分野における地縁者と志縁者による協同体により, 一般的な不動産会社のスキームとは一線を画している。

このような歴史的なコミュニティへの参入実績も含めて, 現在もナゴノダナバンクへの外部からの問い合わせは数多くあり, 今後も空き店舗活用の船頭としての活動が続いていく。

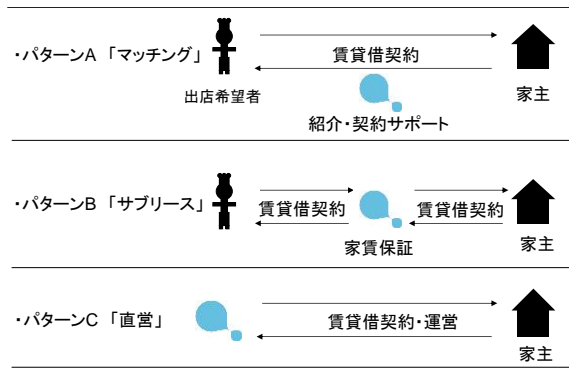


図 1 ナゴノダナバンクの活動パターン

1	地縁	円頓寺商店街 理事	境界の情報収集及び近隣対応など
2	地縁	円頓寺本町商店街 理事	境界の情報収集及び近隣対応など
3	地縁	円頓寺商店街 店主	境界の情報収集及び近隣対応など
4	志縁	まちづくりコンサルタント	コーディネート及び助成金対応など
5	志縁	不動産コンサルタント	賃貸契約内容立案など
6	志縁	建築家	改修・耐震補強, 建替アドバイスなど
7	地縁・志縁	円頓寺商店街 店主・建築家	家主交渉, 改修アドバイスなど

図 2 ナゴノダナバンク構成員とその役割

I-④は I-①②③の行動企画全体を発信している。ホームページでは各プロジェクト毎の情報発信を行い, また, 上述したマップのコンテンツをスマートフォンアプリとして配信している。

## 4. 地縁・志縁協働団体が立ち上がる仕組み

### (1) 協働のプロセス

筆者はかねてから、当該地区のまちづくり活動において主体として、または、コーディネータとして参加している。そこではさまざまな地縁・志縁者が登場し、地域内で共有されたビジョンを持ちつつ、柔軟なプラットフォームから、具体的な課題に呼応する解決策や多様な関心から喚起・誘発される行動から始め、組織化を行っていく、あるいは、活動を広げていくアプローチがあった(図 3)。

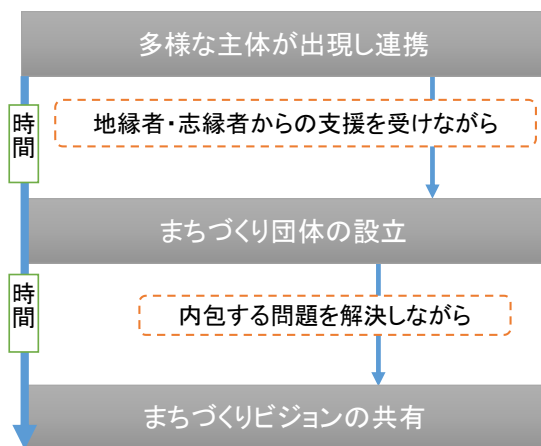


図 3 協働のプロセス

このような動きは、現在の多様化しているまちづくりにおいて、どのコミュニティでも起こり得ることである。そのように考えていくと、まちづくりプロセスの構図は主体側が何らかのシナリオを共有するか、あるいは、コーディネータ側で意識をしながら進めていくことでより円滑に当該地区のビジョンを共有できると考えられる。

### (2) 段階的なまちづくりプロセス

表 1 で示した各団体の出現要因と時間軸を整理すると図 4 になる。そこでは、当初、行政からの働きかけにより、地縁者が喚起され、そこで当該地域への危機感が顕著になり、団体(表 1-②③④⑤)が設立された。また、その想いは内部での新たな想いにつながり、地域での新しいイベントを定期的で開催する団体(表 1-⑥)や、新しい地域媒体を制作する団体(表 1-⑦)の立ち上げへとつながっている。

本論で取り上げた志縁者と地縁者から構成される那古衆は、志縁団体(表 1-⑤⑥)や地域媒体団体(表 1-④)からの働きかけを受けて設立されている。表 1 で示した団体のメンバーの中には、掛け持ちをして別の団体の構成員になるケースも見られる。それは、まちづくりで、目的の違う団体において各主体の専門性がより活かされる場面が存在し、それを限られた人員で相互的に補っていく

ためである。空き店舗の再生を目指す団体ナゴノダナバンクは那古衆のメンバーの建築士が中心となり設立されている。

このように、当該地域のまちづくり活動は、2000 年以降さまざまな団体が設立されているが、それぞれの目標に向かって活動を行ってきた。2012 年度には、これらの団体が中心となり新たなまちづくりプラットフォームとなる円頓寺・四間道境界まちづくり協議会(表 1-⑩)が形成されることになった。

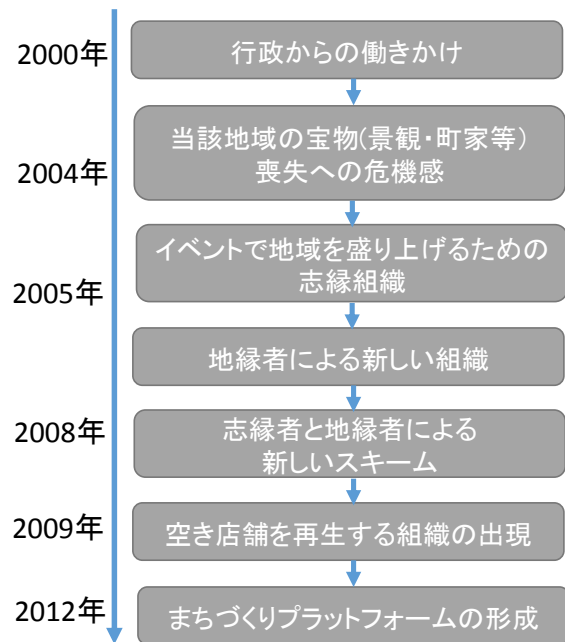


図 4 まちづくり団体の出現要因と時間軸

## 5. おわりに

本稿では、円頓寺・四間道境界まちづくりを事例に、そのプロセスや多様な主体の関係性の変化を整理した。

まちづくりでは多様な人々が集い、対話や議論の場を通じて、ビジョンを緩やかに柔軟かく共有しながら、創発的に活動をしていくことになる。それゆえ、計画も多様な編み方が想定される。地域によっては、地域まちづくり団体が既に取り組んでいる活動やその想いをシェアし、ビジョンや方向性の検討へとつなげていくことも考えられる。ビジョン自体も確定的な固定的なものでなく、アクションを誘発する柔らかなもので十分だろう。将来にわたる施設の管理やまちづくり活動など、地域によるまちづくりもあわせて進めていくことを目指している。

当該地域のまちづくり団体の一つとして取り上げた那古衆は多様な関心を持った地縁と志縁の関係主体が集い、話し合いソフトからハードまでのまどづくりを具体化している。このような地域内での民間主導のまちづくりは今後各地域で実現されていき、まちづくり組織も自律性・自律性やその活動における持続可能性を獲得してい

くことになるだろう。また、こうした積み重ねが地域の社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の向上につながっていく。

地域でのまちづくりを進めていく上では、地域に根ざした地縁組織に加えて、特定のテーマに関心を持って、志の縁で集まった志縁組織、さらには、もう少し緩い枠組みの中で、楽しいことをしたい、あるいは、学びたいという縁で集まった楽（学）縁組織が、今後の担い手として考えられる。こうした多様な主体は、地域において、それぞれ問題意識、関心や利害、地域への想いを持っており、主体間で共通事項や錯綜する利害も存在する。地域が持つ地域資源を活かしながら、同時に、地域のコンテキストや社会資源を読み解きながら、地域まちづくりを進めていくことが求められる。

今後の課題として、各団体のまちづくりが進むなかで、どの段階でどのような支援があることでより効果的に活動が具体化されるかなどの検証を進めていく。

#### 参考文献

- 1)吉村 輝彦, 地域の物語性を踏まえた地域まちづくりの展開のあり方～円頓寺・四間道・那古野界限まちづくりを事例に～, 日本建築学会学術講演梗概集, 2012.
- 2)藤澤徹, 秀島栄三: コミュニティ内の計画策定プロセスとコミュニケーション充足によるプロセス合理化に関する考察 - 中心市街地商店街をモデル地区として, 都市計画論文集, 2010.
- 3)名古屋市: 平成 23 年 名古屋市都市計画マスタープラン, 2011.
- 4)岩田悠佑, 「那古野地区のまちづくりの方向性～那古野スタイルの構築～」平成 23 年度名古屋都市センター研究報告, 2012

(2016.4.22 受付)

## Consideration of effective community development process by various types of actor

Toru FUJISAWA, Eizo HIDEHIMA and Teruhiko YOSHIMURA

Although the main bodies involved with community development have been the people of neighborhood associations and neighborhood councils, due to the changes of the times and diversification of values, a decline of the participation rate for such organizations and a lack of persons who become an officer of community organizations become issues. On the other hand, the environment surrounding local communities has been also changing, such as supporting activities by civil activity groups not only within a community but also from outside of a community become active.

This article summarized the process of town development and its result, and considered people's cooperation in each stage.